

新十津川中だより

新十津川中学校
学校通信
発行

平成22年4月30日

共に希望を語ること

新十津川中学校長 高瀬裕二

北海道らしいすがすがしい青空の広がる日が続くようになり、北国の春の歩みはいっそう足を早めているように感ずる今日この頃です。

さて、新十津川中学校の平成22年度も、スタートして早1ヶ月が過ぎようとしております。今年度、新十津川中学校には68名の新1年生が入学しました。全校あげて心から入学を歓迎し、今後の成長と活躍を期待したいと思います。

私も新十津川中学校1年生です。ある町でボランティアをなさっている方より励ましのお手紙を戴きました。「高校時代、担任の先生が卒業の時に、黒板に書いてくれた詩です」とコメントと出典が記されてありました。

教えるとは 共に希望を語ること
学ぶとは 誠実を胸にきざむこと

これは、フランスのルイ・アラゴンの詩集「フランスの起床ラッパ」(1944)に収められております。

多くの方々のHPやブログ等には、第二次大戦勃発直後、ストラスブール大学では、教授も、学生も、再びストラスブールで学べる日を信じて、ナチス軍に抵抗を開始し、このような極限下における教育への熱い思いを、詩人ルイ・アラゴンは、希望を語ることと表現したのです・・・等と詳しい説明が書かれていました。

また、「三浦綾子さんが好きな言葉で、よく彼女のエッセイに書かれている」とも書かれてありました。いい言葉ですね。教えることは、共に希望を語ること・・・そうですね、共に学ぶ中で未来への希望を語る事ができたら素晴らしいですね。

私たち教師が、教育という未来につながる仕事に情熱を傾け続けられるのは、「夢中になって取り組む姿」「見通しと希望をもって取り組む姿」「自信をもって取り組む姿」など、生徒たちが輝く様子を目の当たりにしているからです。加えて、教えることのプロとして、生徒の魅力を引き出すことに、いささかなりとも誇りと自信をもっているからでもあります。

生徒を輝かせ、その魅力を引き出すことは、生徒が力を伸ばし高まっていくことに、大きな影響を与えます。人は、自分に自信をもち、自分自身を好きになることによって、かけがえのない自分の価値にめざめ、いのち輝く個性的な生き方をしていくことができます。このことを助ける営みが、教育です。この意味において、まさしく「教えるとは、共に希望を語ること」にほかならないと考えます。

新十津川中学校には、保護者の皆さんや地域の皆さんなど、たくさんのサポーターがいらっしゃいます。そして、生徒たちをはぐくむという私たちの使命を支え、力を与えてくださっています。今年も、皆さんにご協力いただきながら、生徒たちと共に希望を語っていきたいと思います。どうぞよろしく願い申し上げます

新十津川中だより

新十津川中学校
学校通信
発行
平成22年5月31日

心が洗われました。ありがとう！ 

新十津川中学校長 高瀬裕二

修学旅行についてお話しします。今年の新十津川中学校のコースは仙台空港まで片道、飛行機を使い、松島を船上より眺め、平泉中尊寺を見学し花巻泊、盛岡手作り村、小岩井牧場を体験し盛岡より新幹線、特急を乗り継いで函館へ向かいました。日程は2泊3日となりましたが移動時間が大幅に短縮でき、自主研修の内容も豊富に取り入れることができます。飛行機の利用校も増え空知では歌志内、南幌、由仁、栗沢などは東京、鎌倉などに旅行先も変更しており、この傾向は今後も増えていくようです。

さて、私が生徒の時代より昭和63年までは、修学旅行は青函連絡船でした。いろいろな学校と抱き合わせになり、ハラハラドキドキの4時間あまりを船室やデッキで過ごし仙台、松島へのコースや十和田、弘前へと向かいました。そして海底トンネル完成とともに時間の余裕もでき、秋田、岩手、青森への旅へと変わっていきました。各地の見学とともに工夫した自主研修を取り入れ、必ず日頃の合唱を訪れた地で記念に歌ってきたものです。多くの教え子たちも青函連絡船の甲板や函館山での合唱は心に焼き付き、クラス会での話題にもなっています。

新十津川中学校においても未だにその伝統は引き継がれ、松島港、平泉中尊寺、盛岡手作り村、小岩井牧場、函館山など、7カ所にて異なる7曲の合唱曲を披露して参りました。たくさんの旅人を前にアカペラで歌うことは恥ずかしく、とても緊張し指揮者への集中も難しく容易ではありません。ともすると不安に押しつぶされ、声もかすみがちになります。それを打ち破るのが、「絶対にみんな声を出してくれる、絶対に逃げ出したりしない」と学年の仲間への信頼感です。

旅人からは「関東にはこんな清々しい中学校はありません」「歌声を聞いて心が洗われました」とありがたい感想をいただきました。百万ドルの夜景、函館山では、本校の合唱を聴いて、「新十津川中学校すごい！自分たちも歌いたい」と見ていた他の中学校が急遽集まって合唱を続けてくれました。3年生みんなの熱い思いが夜景の灯りのように心に染み、伝わっていったのです。

函館山よりの帰り道、「新十津川中学校の3年生で良かった」と女子生徒がそっとつぶやいていました。その日はみんな11時過ぎてもなかなか寝付かれない様子でした。

※WEBにて新十津川中学校の様子を発信しております。ご覧いただけますと幸いです。

WEB 校長室 青雲の志【 <http://www1.odn.ne.jp/~aao32720/index.shtml> 】

新十津川中だより

新十津川中学校
学校通信
発行
平成22年6月30日

中体連駅伝大会 2連覇！ 感動をありがとう！

新十津川中学校長 高瀬裕二

今年も駅伝大会を皮切りに、中体連の熱い戦いが始まりました。中空知駅伝大会は昭和28年から始まり、今年で第57回を数えます。保護者の皆さんの中には選手として活躍された方も多いのではと思います。

当時のことを、中空知で教員をなされていた文京区の吉田邦男さんや砂川市在住の多田清一さんにお聞きしたところ、様々なコースの変遷があったことがわかりました。昭和44年位までは明苑中スタート、砂川、歌志内、赤平、ゴール明苑中の10区間。その後スタートが砂川市北光中に移り、砂川中、歌志内、赤平、ゴール明苑中の8区間となったそうです。

昭和56年頃、歌志内のずい道工事でコースがスタート芦別市啓成中、ゴール明苑中の国道コースに変更となりそれが平成19年まで続きました。

毎年、沿道の各中学校全校生徒による応援や保護者の皆さんの熱い声援が、疲れた選手の背中を押し続けていましたが、平成20年には交通事情や生徒の安全面から芦別市なまこ山総合運動公園周回コース（6区間、15.4km 1区2.9 2～6区2.5km）に切り替わりました。////////////////////

運命の6月8日がやってきました。新十津川中駅伝メンバーは燕幸輝、阿部和貴、引地雄哉、佐々木巧、坂下悠介、川下侑真、杉本みちる、今井信之介の8名で、校内練習・予選を経て30名の仲間より選抜されました。

選手たちは「選ばれなかった22名の仲間のためにも是非連覇を果たすぞ！」とタスキを誰よりも早くつなぎ、1区から一度も先頭を譲らず真の王者としての走りを見せてくれました。会場には選手のご家族の皆さんや熊田教育長も駆けつけ「がんばってー」「よし！がんばれ！」と、声がかすれるまでの応援をなされ、おかげで、心のバトンを繋ぎ、大会新記録にて連覇を飾ることができました。まことにありがとうございました。

記録は53分59秒＝大会新＝、2位江陵中55分19秒、3位明苑中55分38秒、4位芦別中、5位赤平中、6位歌志内中、7位開西中、8位啓成中、9位石山中、10位赤平中央中。

西谷監督は「練習よりいいタイムを出す生徒たちはすごい。3連覇に向け2、1年生に高い志をもたらした」と、選手たちの走りに感動していました。

他の種目も「駅伝に続こう！」と絆をしっかりと繋ぎ、夢は大きく空翔ける鳳のごとく、新十津川中学校は頑張ります。皆様のいっそうのご声援よろしく願いいたします。

※WEBにて新十津川中学校の様子を発信しております。ご覧いただけますと幸いです。

WEB 校長室 青雲の志【 <http://www1.odn.ne.jp/~aao32720/index.shtml> 】

新十津川中だより

新十津川中学校
学校通信
発行
平成22年7月26日

心のスイッチ



新十津川中学校長 高瀬裕二

//////// 空知中体連大会において野球部とソフトボール部が念願の初優勝を果たした。////////

古い小学校の体育館の2階、古ぼけた卒業記念の版画レリーフが飾られていました。今から38年前に当時の6年生一人一人が、「心のスイッチ」という詩を一字ずつ15cmの版木の板に彫り、並べて張ったものでした。それは、マットや多くの体育用品に隠れていて、小学生たちはその存在に全然気づいてはいないようでした。

「心のスイッチ」という題名が気になり先生方にお聞きしても、詩の作者や版画のレリーフにしたいきさつはわかりませんでした。地域の方々にお聞きしているうちに、50歳くらいの大工さんが「それは、僕たちが卒業記念に彫ったんですよ。私の彫った文字は確か・・・これです」と当時を懐かしがって話してくれました。「心のスイッチ」を調べてみたら、50年以上も前に東井義雄さんという教師が発表し、全国の先生方がこども達に読んで聞かせた詩と言うこともわかりました。

「心のスイッチ」

東井 義雄 作

人間の目は不思議な目
見ようという心がなかったら 見ても見えない
人間の耳は不思議な耳
聞こうという心がなかったら 聞いていても聞こえない
同じように先生の話も聞いていても
ちっとも聞こえない人がある
ほんとうにそうだと 腹の底まで聞く人もある
同じように学校に来ていても
ちっともえらくなならない人がある
毎日ぐんぐんえらくなっていく人もある
今までみんなから つまらない子だと 思われていた子でも
心にスイッチが入ると 急にすばらしい子になる
心のスイッチが
人間をつまらなくもし すばらしくもしていくのだ
電灯のスイッチが 家の中を明るくもし、暗くもするように

この詩にある「心のスイッチ」・・・今、わかるような気がします。「素直さ」が「心のスイッチ」のひとつかもしれません。優勝した野球部とソフトボール部の練習の様子を思い出したとき、すごく温かい気持ちが湧いてきました。そして何年もかけて答えを見つけてくれたたような、そんな気持ちにさせてくれました。

※WEBにて新十津川中学校の様子を発信しております。

WEB 校長室 青雲の志 【<http://www1.odn.ne.jp/~aao32720/index.shtml>】

新十津川中だより

新十津川中学校
学校通信
発行
平成22年8月31日

秋は心を染める色の中で、感性を磨く

新十津川中学校長 高瀬裕二

27日間の長かった夏やすみ、全員が元気に登校した笑顔を見られ本当にうれしく思います。この夏休みはまさに猛暑という言葉通りとても暑い日が続きましたが、吹奏楽部が空知大会で金賞受賞、中体連全道大会ではソフトボール部、野球部、水泳部、陸上部の諸君が空知の代表とし大活躍しました。特に野球部は見事初優勝を成し遂げ倉敷市での全国大会に出場するなど、新十津川中学校が大変熱く燃えた夏休みでした。

中体連野球の全国大会は8月19日より、「白壁の美しい町並み」で有名な岡山県倉敷市で行われました。猛暑そして過密なスケジュールの中、地元中体連関係者として本校チームに同行して、お世話していただいたのが地元倉敷西中学校の倉本教諭でした。「新十津川中の野球部は素直なチームです。野球部の監督をしているので、是非応援をさせて欲しい。うちの野球部、大声を出せます。鳴り物、太鼓はありませんがペットボトルをたたいて新十津川中学校を応援いたします」と申し入れがあり、当日は部員46名、陸上部員8名までもが急遽新十津川中学校の応援団として、最後まで声を枯らして応援してくれました。

栃木代表上三川中との試合は息詰まる投手戦となり、惜しくも敗れてしまいましたが、倉敷市西中の皆さんの熱い「友情応援」に選手達は常に励まされ落ち着いてプレーすることができました。応援席でのとてもうれしいエピソード、皆さんにもお届けいたします。

さて、今年の8月6日も、開催地倉敷市の隣町、広島市の平和公園は、被爆者や世界から核廃絶を訴えたいと集う人々の、深い祈りに包まれました。朝8時からのテレビ中継、「私たちの身近でもいじめや暴力など、悲しい出来事が起こっています。これらの問題を解決しない限り、私たちの地球に明るい未来はありません。しかし、過去を学び、強い願いをもって、一人一人が行動すれば、未来を平和に導くことができるはず。次は、ぼくたちの番です。」と小学生の高松樹南さんと横林和宏君による子ども宣言。続いて潘基文（パン・ギムン）国連事務総長は、「65年前、この地には地獄の炎が降り注ぎました。今日、ここ平和記念公園には、一つのもしびが灯っています。それは平和のともしび、その炎を希望の光へと変えようではありませんか。核兵器のない世界という私たちの夢を実現しましょう。」と訴えました。

夜8時からNHKにて吉永小百合さんが大平数子作「慟哭」をアルビノー二の「アダージョ」の音楽と共に朗読。子どもの名前を呼ぶ場面・・・皆さんも見られたでしょうか。

ふと、気がつくとおおを伝わる涙と共に、平和への願いを更に強く持った私がいきました。開催地倉敷市と広島市との近さに驚きながら。

8月23日、今日から始まる学期は、1年中で一番さわやかな気候に恵まれ、「実りの秋」「灯火親しむ」とか「スポーツの秋」と言われるように、勉強や運動に打ち込む絶好の季節です。また、中学生が大きく成長する時です。しっかり目標を持って日々の授業に集中し、行事や部活動などにも積極的に取り組んで自分自身を鍛えていくことを願っています。

※WEBにて新十津川中学校の様子を発信しております。

WEB 校長室 青雲の志【<http://www1.odn.ne.jp/~aao32720/index.shtml>】

新十津川中だより

新十津川中学校
学校通信
発行
平成22年9月30日

感謝・感動・感心・やりがい



新十津川中学校長 高瀬裕二

9月10日、本校の総合的な学習の時間の発表会「新中タイム」が行われました。

テーマは2年生がキャリア教育（職場体験）、3年生が福祉です。夏休み明けに一人一人が課題をもち、体験実習し、考えをまとめました。そしていよいよ9月10日、各階の廊下や教室を有効利用してポスターセッション形式で全校生徒や保護者の皆さん、中空知の先生方に発表しました。

各グループの持ち時間は学年を前半の部と後半の部に分かれているので、約25分です。頑張っても5回くらいしか説明することができません。そのため、生徒や保護者の皆さん、参観にこられた先生方を引き止めるためには、スポーツ新聞の見出し的な要素でプレゼンテーション、PCの活用、資料の作成、模造紙等への的確なまとめ、そして身振りなどを工夫し、引きつけなければなりません。前日には昨年先輩の発表等を参考にして、放課後遅くまで入念にリハーサルを繰り返し、まさに探求し表現する力を身につけてゆきました。

3年生の福祉については、特に「3KY」のことばを多くのグループが説明していました。世間では以前福祉について「汚い 臭い 気持ち悪い 安い」だったけれど、かおる園や陽だまりの郷などで説明してくれて方々が、今は「感謝 感動 感心 やりがい」のある仕事の「3KY」です。「また、絶対にそのような職場にしていかなければならないと思っています」と、口々に熱い使命を語り福祉の仕事に臨んでいたそうです。

3年生は緊張感の中にも「介護とは今までお世話することと考えていましたが、利用する人々がどう生きたいのかを考えていくことが大切だと思います」、「お年寄りが自分らしく生活していける場所が増えていけばよいと思う」、「新しい3KYから勇気をいただきました」と、自信を持って感想を発表し、学習前より一回りも二回りも大きく成長させていただきました。これもひとえに快く職場体験を受け入れてくださいました企業の皆様や、大変な重労働の福祉・介護の場に生徒達を受け入れて下さいました福祉団体の皆様のおかげです。誠にありがとうございました。

10月はさわやかな気候に恵まれ「食欲の秋」でもありますが、「文化の秋」「芸術の秋」と言われるように、学校祭での様々な文化活動の取り組みを通して中学生が大きく成長する時です。しっかり目標を持って日々の授業に集中し、行事や学級活動などにも積極的に取り組んで自分自身を鍛えていくことを願っています。

※WEBにて新十津川中学校の様子を発信しております。

WEB 校長室 青雲の志【<http://www1.odn.ne.jp/~aao32720/index.shtml>】

新十津川中だより

新十津川中学校
学校通信
発行
平成 22 年 10 月 31 日

ノーベル賞と闘魚・ベタ



新十津川中学校長 高瀬裕二

北海道鶴川町出身の北海道大学鈴木先生がノーベル賞を受賞しました。今まで困難と言われていた二つの有機物、イメージとしては火の中に入れれば燃える「2つの物質を、なかよく手をつなぎ合わせる」新しい合成方法を確立したことで、ガンの薬、高血圧の薬、抗生物質などの医薬品やテレビの液晶などがつくられたのです。

この「2つの物質が仲良く」とのニュースを聞いて、ちょうど一年前のことを思い出しました。私は校長室のテーブルの上で「ベタ」という魚を赤、青色の2匹飼っていました。ベタは近所のホームマック等のお店にも並べられているので、皆さんも知っている人も多いかと思います。

理科の先生より「えら呼吸のほかに肺呼吸ができるので酸素をぶくぶくと与えなくてもいいですよ」「とても飼いやすいですよ・・・」とうまくのせられて、つい飼ってしまいました。

お店でも、ブクブクがいないので、ビーカーのような容器の中に、一匹ずつ飼われていました。

3学期、受験が近づき面接練習のために校長室に来ていた生徒達から質問がありました。校長先生「どうしてこんな狭い瓶の中で飼うのですか?」「大きな水槽で仲良く一緒に飼えばいいのに」・・・

実はね、このベタは別名「闘魚」と言って、雌が生んだ卵を雄が守り育てる魚です。近くに寄ってくるものには雌でも追い払い、まして雄なら相手が傷つき弱るまで徹底的に攻撃を続けて子供を守る習性を持っているので、仲間とともに住めない魚なんですよ。～と、理科の先生より教えられたとおり説明しました。でもね、いつも「ベタ」を見て、「金魚やグッピーのように、大きな水槽で楽しそうにそして仲良く住まわせてやりたい」と思っています。そして、今はコップの中のベタを見るたびに、二匹が仲良くなれない習性がわかっていても、「切ない気持ちで胸が痛みます」とも付け加えました。

学校生活や学級生活でみんながベタであつたらどうなるでしょうか。それぞれの活動でみんなが一人一人理由をつけ相手の心を傷つけます。それは全然楽しくありませんし、相談できる仲の良い友達もいません。とても切ない学校ですね。長年にわたり新十津川中学校には全校生徒全員で取り組む「Be-Happy 集会」があります。

まさしくそれこそいじめを無くし、みんなが仲良く勉強ができる学校を創っていこうという、ノーベル賞にも負けない生徒会の強い願いなのです。今年は11月26日の公開研究会に集会を行います。生徒全員みんなが「Be-Happy」であるよう、一人ひとりが真剣に考えて集会に臨みます。是非授業参観と併せてご覧いただけますと幸いです。

※WEBにて新十津川中学校の様子を発信しております。

WEB 校長室 青雲の志【<http://www1.odn.ne.jp/~aao32720/index.shtml>】

新十津川中だより

新十津川中学校
学校通信
発行
平成 22 年 11 月 30 日

重いバットを振り続ける

新十津川中学校長 高瀬裕二

11月15日、滝川高校、滝川西高校、滝川工業高校、砂川高校、新十津川農業高校より、高校2年生のさわやかな先輩7名が“高校説明会”にきてくれました。高校の先生方でなくて、在籍している先輩が説明するという、本校ならではの説明会です。

会の進行は全校協議会の議長団3年生が行います。

「あなたの高校の校風について良いことばかりでなく、良くないこと、嫌だなあと思うことなどザックパンに教えてください。」「高校の授業はどうですか？勉強で一番大変な思いをすることは何ですか？」「高校3年間でどのような資格をとれますか？また卒業後の進学状況をわかる範囲で教えてくださいと」など1時間にわたり会を進めます。大変難しい内容の質問なのですが、先輩たちは、具体的な例をあげ、わかるように丁寧に答えてくれました。

最後に「後輩に残す言葉はありませんか。」との質問

「新十津川中学校時代はとても楽しくて、未だに戻りたいような気持ちになります。しかし、つらくとも夢を叶えようとこの高校を選びましたので悔いはありません」「高校は自分の気持ちをしっかり持ち、流されないようにすることが大切です。是非、中学校時代から、“重いバットを振り続ける” そんな気持ちを持ち続けて欲しい」、と話してくれました。

この時期は90パーセントの3年生はすでに志望校を決めていたのですが、会場は一瞬シーンとなり、頭の中で「重いバットを振り続ける」という先輩の言葉を繰り返しています。私たちは一生学ばなければならぬ。ともすると、夢から逃げ出して、熱き初心を忘れている自分がここにいます。努力無しには夢は逃げていく、重いバットを振り続け自分の目指す道に向かっていこうという、そんなすばらしい言葉を送ってくれる先輩に参加者全員心から拍手を贈っていました。

「鈴をふる」と表現した詩人もいる。虚実が複雑に絡み合うこの世の中で、自分の目標と夢を見失わないように、迷いがあるときには鈴を鳴らし、真実を思い出して前に進んでいこう。

・・・巡 礼・・・

真実、諦め（あきらめ）、ただひとり、
真実一路の旅をゆく。
真実一路の旅なれど、
真実、鈴ふり、思い出す。

歩きながら口ずさむと妙に合うふしぎなリズム。七五調ではなく、八五調になっているこの詩と、「重いバットを振り続ける」という先輩の励ましの言葉が重なって耳にずっと残っていました。

※WEBにて新十津川中学校の様子を発信しております。

WEB 校長室 青雲の志【<http://www1.odn.ne.jp/~aao32720/index.shtml>】

新十津川中だより

新十津川中学校
学校通信
発行
平成 22 年 12 月 24 日

眼聴耳視

<げんちょうじし>



新十津川中学校長 高瀬裕二

空からの贈りものが舞い降りてきます。ピンネシリの指笛とともに、北国の冬はいつそう足を早めているように感ずる今日この頃です。

12月14日、ある中学校での講演会に駆けつけました。今年3月に北海道高等盲学校の校長先生を退職なされた、澤田勝昭さんの「見えない、『おやし』のつぶやき・・・大丈夫」という講演会。生まれつき全盲の澤田さんは苫小牧市樽前の生まれ。札幌の盲学校にてあん摩、マッサージ、指圧、はり、きゅうの技術を学び、滝川市男澤病院に勤めました。そして同じ下宿、滝川工業高校の友達にわからないところを教えてもらいながら、東京教育大学に進学して盲学校の先生になられたそうです。澤田さんは、

座右の銘などというものを持ち合わせない私ですが、「眼聴耳視（げんちょうじし）」ということばを大事にしています。と、体育館で見ているだろう、聴いているだろう生徒たちに語りかけます。

「眼で聴いて、耳で視る？」

新十津川中では集会時に、「話は、眼と耳と心で聴く」というのが生徒の合い言葉になっていますので、私は似たような言葉「眼聴耳視（げんちょうじし）」の不思議な響きに引きつけられてしまいました。

全盲の澤田さんは続けます。

「眼で聴いて、耳で視る」

眼で何を聴くのか…遠くの山をじっと視ているだけで、木の葉のふれあう音、小鳥のさえずりなど自然の息づかいが聞こえてきませんか？

耳で何を視るのか…話をしているだけで、その声の抑揚や口調、醸し出す雰囲気から容姿そして心を含め、その人そのものが見えてくるような気がしませんか？

人の心は、1に声、2に顔、3に姿に現れるといいます。

「眼聴耳視（げんちょうじし）」とは「聴けば見えてくる、視れば聞こえてくる」ということです。逆にいえば、眼で視るもの、耳で聴くものだけで、何事も評価してはいけません。……………と

<参考>学校便り 藻風通信 北海道高等盲学校 第5号 平成20年3月24日発行

生徒を輝かせ、その魅力を引き出すことは、生徒が力を伸ばし高まっていくことに、大きな影響を与えます。「眼で視るもの、耳で聴くものだけで、何事も評価してはいけません」、まさしく学校は「眼聴耳視（げんちょうじし）」そのものでなければならぬと考えます。

新十津川中学校には、保護者の皆さんや地域の皆さんなど、たくさんのサポーターがいらっしゃいます。そして、生徒たちをはぐくむという私たちの使命を支え、力を与えてくださっています。来年も、皆さんにご協力いただきながら、生徒たちと共に希望を語っていきたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。皆様、よいお年をお迎えください。

※WEBにて新十津川中学校の様子を発信しております。

WEB 校長室 青雲の志【<http://www1.odn.ne.jp/~aao32720/index.shtml>】

新十津川中だより

新十津川中学校
学校通信
発行
平成 23 年 1 月 17 日

ローリングストーン

新十津川中学校長 高瀬裕二

皆様、新年明けましておめでとうございます。

私は除夜の鐘を聞いてから、新十津川中学校3年生の全員の高校合格を願い、近くの神社に初詣。神主さんに室内へと案内され、巫女さんより柵を戴き参拝しました。御神酒を戴きながらおみくじを引くと願いは通じたのか神頼み、今年も「大吉」4年連続。

「受験～願い事、努力すれば、必ず叶う」と書いてありました。まずは第一関門突破です。

願い事といえば昨年8月、上磯のトラピスト修道院でマリア様にもお願いをしました。ちょうど知内町の中体連野球大会、準々決勝の帰り道、上磯のトラピスト修道院、ルルドのマリア像に会いに中腹まで登って行きました。

長い山道では途中、シスターと外国の老人にお会いしただけです。修道士のお墓の辺りはひっそりと静まり蝉の音が響きます。大変暑い午後でした。吹き出る汗を拭かないうちに、信者でもないのに図々しくお願いをしてしまうのは私の悪い癖、まさに他力本願ですが、新中野球部の勝利を願いました「明日は絶対優勝させて下さい」

その夜、函館の友人とともに、食事に行ったお店のご主人にお話しました。「校長先生、新中優勝できるといいですね。マリア様も今までの野球部の方々の努力をご覧になっているでしょう」と共に優勝を願ってくれました。

そのご主人のエッセイが道新の1月9日の「朝の食卓」欄に載っていました。題は「ローリングストーン」転がる石。アメリカとイギリスでは解釈が異なるのだとか。アメリカは「積極的に動き回る人にはその能力をさび付かせる事はない」という解釈をしているのに対し、イギリスは「落ち着き無く動きまわっている者には能力が身につかない」という正反対の意味になるそうで、大変おもしろい。

冬休み中、外は大変寒いのですが、部活動、各学年の学習相談等と、いつも学校中明るい生徒の声がこだましていました。私たちが高校時代に習ったのは確かアメリカ式ローリングストーン。大吉のおみくじ曰く「努力すれば、必ず叶う。努力しなければ運はこないし夢は厳しい」この心意気が、新十津川中の生徒諸君にたくましく宿っていることにうれしくなりました。

3学期も教職員一同全力を尽くします、今まで同様のご支援、ご協力よろしく願いいたします。

※WEBにて新十津川中学校の様子を発信しております。

WEB 校長室 青雲の志【<http://www1.odn.ne.jp/~aao32720/index.shtml>】

新十津川中だより

新十津川中学校
学校通信
発行
平成 23 年 2 月 28 日

天使のささやきを聴いたことがありますか

新十津川中学校長 高瀬裕二

今日もしんしんと雪が降っています。気温も下がってきています。昨日のテレビで日本の最低気温がマイナス41℃、明治時代に旭川市と報じていました。実は気象台での観測ではありませんが、気象庁公認でマイナス41.2℃という記録があるのです。2月17日、ずっと北の町、モシリという小さな集落での35年前の記録です。漢字では「母と子の里」と書きます。

「母子里」って、とっても素敵な名前ですね。アイヌ語で世界・国という意味です。でもそのモシリに、あまりにも寒さが続くものだから、テレビ局がやってきて、「焼酎も凍る！毎日が冷凍庫の世界、とてもひどいところだ」「飛んでいるスズメも寒さで落ちる」「嫁も来ない」と面白おかしく報じていました。

ほんとうに「モシリ」はそんなひどいところなのでしょうか？素敵などころがないのでしょうか？

中学を卒業し10年が経ち「モシリ」生まれの若者達が戻ってきました。そして、「マイナス41.2℃の世界の素晴らしさ」を全国の皆さんに伝えたいと集いを計画しました。



マイナス41.2℃の世界では、ダイヤモンドダストが天使の羽のようにキラキラキラと空中に舞う一瞬、静寂の中に何かが聞こえてくる。まるで「天使の囁き（ささやき）」のようだ。

札幌の雪祭りと併せて、毎年2月11日に、この記録を観測した母子里にての「天使の囁きを聞く集い」は、今や全国的なものとなり、毎年多くの若者が「天使の囁き」を聞こうと日本中からやって来ます。ボランティアやNPOも参加するようになり、もう25年は続いています。

「ぜひ今回は、校長先生も来てください！」

「体験したマイナス41.2℃の世界」「当時のモシリ地域の状況」「当時の時代背景を話して下さい」と講演のお誘いを受けました。母子里は新任の地で、もう35年も前のことなので大変恥ずかしい・・・でも、45歳近くになったかつての子どもたちの願い、とても断れませんでした。

何時間も車を走らせ集合時間の午後5時、私が行くと既に宿舎のレイクハウスには全国から40名近くの方々がやって来ていました。ボランティアで春よりここのワールドセンターを手伝っている奈良の女性。仕事を終え今年も最終便で飛んできましたと、神奈川の女性。もう25年連続ですと、釧路よりの男性、初めは沖縄からの参加だったそうです。秋に初めてきて、このイベントを知りましたと綾小路きみまろのような、埼玉の農家のおじさん。ネットのブログを見てなんとなく思い切ってきたと、事情を話さない東京の女性。でも、すぐ常連・新米ともにほんとうに仲良くなってきました。

夜にみんなで母子里のマイナス41.2度の記念モニュメントの前でダイヤモンドダストが表れるのを待ちました。アイスキャンドルも灯されました。気温はどんどん下がっていきます。氷で作ったグラスにジュースを入れて楽しんでいると、ライトアップされた白樺林に期待通りキラキラと舞うダイヤモンドダストが現れてきました。

「じいっと」、「目を閉じて」、「耳を澄まして」、「ここで聴く」・・・

みんな、静かに、祈るように「天使の囁き（ささやき）」を聞いています。

静寂の中に、いまの、自分自身をみつめている自分がいることに気づきました。

「天使の囁き」とは、「忘れていた、本当の自分への気づき」ですと、天使は優しく、ささやいてくれました。

※WEBにて新十津川中学校の様子を発信しております。

WEB 校長室 青雲の志【<http://www1.odn.ne.jp/~aao32720/index.shtml>】

新十津川中だより

新十津川中学校
学校通信
発行
平成 23 年 3 月 25 日

他人には見えて自分には見えない幸せ



新十津川中学校長 高瀬裕二

3月13日、東北・関東大地震でお亡くなりになられた方々のご冥福を祈り、黙祷の中で、卒業式が始まりました。千年に一度という大地震、そして大津波と原発事故。できれば私の一生の中では起こって欲しくなかったと、未だに現実が信じられない自分がいます。式辞にて、今、生きていることに幸せを感じ、校長の最後の授業として「幸せ」について、共に続きを考えていきました。

みなさんは、中学2年生の国語の時間に学習した、吉野弘さんの詩「虹の足」を覚えているでしょうか

雨があがって、行く手に榛名山が見えた頃、バスの中から虹の足を見たのだ。
その虹の足の底に小さい村といくつかの家が、虹に抱かれて七色に染められていた。
「おーい、君の家が虹の中にあるぞ！」と叫んでも虹の足に触ろうとする人影は見えない。
たぶんあれは、バスの中の僕たちには見えて、村人には見えないのだ。そんなこともあるだろう。他人には見えて自分には見えない幸せの中で、格別驚きもせず、幸福に生きていることが……。という詩でしたね。

他人には見えて自分には見えない幸せ……。当たり前と思っていた幸せ。今まで

校歌を思い出してみよう。そう、私たちはずっとピンネシリのふもとで学んできた。

新十津川の春。ピンネシリから吹きおろる風が広い平野の雪をとかしてくれる。ピンネシリの残雪が春の足音と重なる。広いグラウンドに球児の声がこだまし、新十津川の春が謳歌する。

新十津川の夏は短い。果てしなく青い空を流れる雲、水田に映るピンネシリ、徳富川、総富地川の新緑の岸辺、そして流汗悟道の文武の訓（おしえ）。若者達の熱い夏が踊る。

新十津川の秋。稲穂田が黄金色に豊かに波打ち、ピンネシリに落ちる夕日。心を染める色彩の中で個性を育み、感受性を磨き、若者の夢奏で行く。

新十津川の冬は長い。真白い雪原にどっかと座るピンネシリ。吹雪舞いピンネシリの指笛がきこえる。厳しさもまた糧となる。人として北の空に輝く北極星のごとく。

校歌に込められたピンネシリの願いを、もうみなさんは気がついているでしょう。

四季折々のピンネシリは、ピンネシリの麓という風土と新十津川120年の歴史の中で私たちに、しっかりと、感動と知恵と勇気を与えてくれていたのです。それぞれの時代に、その時代の課題、矛盾がありました。君たちがこれから向かう時代もまた多難に満ちていましょう。しかし、毎日歌った新十津川中学校校歌は君たちの胸に深く刻み込まれているのです。これからの人生において、校歌に刻まれたピンネシリの願いが、君たちに力を与えてくれることを願ってやみません……。

64名の卒業生は、3年間この学舎で共に過ごせた「幸せ」をかみしめ、未来に羽ばたいていきました。

※WEBにて新十津川中学校の様子を発信しております。

WEB 校長室 青雲の志【<http://www1.odn.ne.jp/~aao32720/index.shtml>】

新十津川中だより

新十津川中学校
学校通信
発行
平成 23 年 4 月 28 日

「行ってきます」 関西へ

新十津川中学校長 高瀬裕二

すがすがしい青空の下、明るく元気な 61 名の新入生を迎え、新十津川中学校が平成 23 年度がスタートしました。新芽が膨らみ、生命の息吹を感じるこの季節、4 月生まれの私は「春」が一番好きです。私がこの 4 月を好きな理由がもうひとつあります。それは、新しい学年を迎え、良い意味で今までの自分をリセットして、「心のスイッチ」を ON に切り替え、新たな自分をつくれそうな気がするからです。校歌には「志操つちかい、未来に羽ばたけ」と歌われています。新たな気持ちで生徒達と共に希望を語っていきたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

さて、今年の修学旅行についてお話しします。保護者の皆様の中学生時代は連絡船派、それとも JR 海峡線派？ 昭和 63 年までは修学旅行は青函連絡船でした。4 時間あまり船室やデッキで過ごし仙台、松島へのコースや十和田、弘前へ、そして海底トンネル完成とともに時間の余裕もでき、岩手、秋田コース等へと変わっていきました。

そして近年の新十津川中学校のコースは片道を飛行機を使い仙台空港まで行き、松島を船上より眺め、平泉中尊寺参拝、花巻泊、岩手小岩井牧場を体験し盛岡より新幹線で 100 万ドルの夜景・函館山へと向かう東北・函館コースです。

しかし、3 月 11 日の東日本大震災の地震・津波・福島原発事故により、修学旅行そのものの変更が求められました。福島空港が使えず、JR 特急の運行の削減、計画停電、余震などで様々なものが白紙となりました。

期日が迫る中、航空会社よりの新料金の提案があり、4 月 12 日、教育委員会との協議を経て、生徒の安全・安心を考慮して、今年限りの措置として、関西方面（大阪、京都、奈良、兵庫）へと変更いたしました。

日程は 5 月 15 日（日）出発の 2 泊 3 日、旅行金額も大幅変更はありません。高校の修学旅行と重なる部分が多いのですが、京都、奈良には有名なお寺や神社、すてきなポイントがいっぱいあります。2 日目の京都市内自主研修は、時間を大幅に確保いたしましたが見学時間が足りなくなることでしょう。下級生からの「いいなー！」の声をよそに、3 年生はガイドブック片手にインターネット、我らの「My 京都」を発見しようと、グループ毎に独自の研修計画を立てているところです。報告は次号のお楽しみです

※WEBにて新十津川中学校の様子を発信しております。

WEB 校長室 青雲の志【<http://www1.odn.ne.jp/~aao32720/index.shtml>】

新十津川中だより

新十津川中学校
学校通信
発行
平成 23 年 5 月 31 日

みなさんのおかげです “おおきに”



新十津川中学校長 高瀬裕二

初めての関西への修学旅行。ハプニングもまたお土産、道中の一端をご紹介します。

気温はグングン上がり 28℃を記録した、5月16日（月）いよいよ京都での自主研修。私は清水寺研修グループに同行いたしました。本州各地よりの修学旅行生で埋め尽くされた、有名な清水の舞台では厳かに宮司さんや巫女さんが震災の復興を願い、厄払いの儀式を行っていました。なぜ「お寺で神社の宮司さんのお祓いや巫女さんが舞い」をと思ったのですが、「清水の舞台」と言われるように、本来の目的は舞楽を奉納するための舞台であると聞いて納得。私達も、宮司さんよりお祓いの紙吹雪を受けながら、東北地方被災地の皆様の早い復旧を心から祈りました。

この清水寺研修班の昼食は、祇園の有名なラーメン屋さんと計画されていました。京都の食事と言えば定番は湯豆腐などですが、小遣いを考えると、やはり「安くて・うまい」のが一番です。地元祇園の人に場所をお聞きし、やっと着いたのですが、「本日定休日」のお札が。歩き通しで、とにかくおなかがぺこぺこです。偶然眼に入った「お好み焼き」店の看板。「お腹すいたああ！このお店で良いから入らない？」と、みんなで祇園の交差点の前で相談していたら、「ここは以前入ったら、おいしくなかったのよ」、「みなさんはお昼は何が食べたいの？」と80歳位のおばあさんが声をかけてくれました。交差点で偶然彼女たちの話を聞かされていたようです。「お腹ぺこぺこなので、お好み焼きにします！」と返事をしたら、「昔の私の家の近くにおいしいお好み焼きのお店があるので、お連れしますよ」とグングン祇園の中に進んでいきます。道すがらボランティアガイドさんのように、祇園の歴史についても親切に説明してくれました。

着いたところは祇園の辰巳神社すぐ横、白川沿いにあるお好み焼・鉄板焼のお店です。「北海道からの中学生さん達が、おいしいお好み焼きを食べたいと言っているものだから、連れてきたのよ。先生も一緒よ」と女将さんにご紹介までして戴きました。そのお婆さんのお薦め通り、香りの良い甘いソースで味けられたのお好み焼き。「めっちゃうまい！！」誰かさんの叫び声は白川沿いを歩いている観光客にも届いているようでした。

お好み焼きを食べると、エネルギーも沸き、大阪風に「おおきに！」を連発し、祇園から八坂神社、産寧坂へと向かいました。「ねねの道」では、おこぼを履いて石畳をお散歩している美人の舞妓さんたちに出会いました。「あっ舞妓さんだ」と走りより、お願いして写真を撮らせて戴いていると、「本物ではないのよ・・・ごめんなさい」と謝る声が・・・。お化粧からカツラ、衣装まで用意されての変身舞妓さん。でもこの時間、修学旅行の私たちにとっては、本物の舞妓さんには出会えないのです。心優しい素敵な「舞妓さん」出会えて、京都を味わう事ができました。写真ありがとうございました。京都風に おおきに (^_^)。

書き尽くせないたくさんの思い出は中学生の彼らの人生の宝物となることでしょうか。最後になりましたが、快くこのような機会を与えて下さいました、保護者の皆様に心から感謝申し上げます。

※WEBにて新十津川中学校の様子を発信しております。

WEB 校長室 青雲の志【<http://www1.odn.ne.jp/~aao32720/index.shtml>】

新十津川中だより

新十津川中学校
学校通信
発行
平成 23 年 7 月 1 日

日本一を武器に

新十津川中学校長 高瀬裕二

ピンネシリよりの爽やかな風の中、保護者の皆様におかれましては、常日頃、本校生徒のためにご尽力頂いていることに心より感謝とお礼を申し上げます。

さて、文芸春秋7月号、若干30歳の夕張市長鈴木直道氏が、「日本一」を武器に、と題してエッセイを寄せていました。氏は家庭の事情で高校卒業と同時に東京都庁に採用され、上司の理解もあり、仕事と並行しながら法政大学の夜学で学ぶことができたそうです。

日本一若い市長でもあるのですが、まさに、「逆境日本一」からのチャレンジを「日本一」を武器に、と題したのでないだろうか。厳しさもまた糧となるごとく、「日本一」を武器に、志操は夕張の天高く羽ばたいているのです。

新十津川の歴史は「逆境日本一」からの挑戦そのものでした。今年も6月20日、「日本一の絆」を確かめる、開町121年記念式典が行われ、母村よりもたくさんの方がお祝いに駆けつけていました。

午後1時、慌ただしく、校長室に十津川村長の更谷さんと議長の中南さんが突然やってきました。お二人が「校長先生、あの子達に会いたいんだ。大きくなっているんだろうか？」おっしゃいます。3年前の母村訪問の時に家に泊まってくれた、ちびっこ女の子5人のことが忘れられないのです。その5人とは2年生の、松葉みなみさん 石丸緋茄梨さん 石橋紗耶花さん 鈴木真帆さん 山下了子さんの5人でした。帰りの会の途中でしたが5人がすぐに集まって、ご対面となりました。「あっ、おじさんだ。あのときはありがとうございました」と、なつかしそうに十津川村のことを思い出しています。中南さんは大切に持ってきた、「軽トラの上に乗った5人の写真」どおりに座ってもらい、見比べて「こんなに大きくなって」「立派な中学生さんになって」と、血のつながっている家族以上に、かわいくて、愛おしくてたまらないようです。

お二人の心からのこの気持ちは何なのでしょう。

私は、式典の中で更谷村長が、「皆さんを未来永劫忘れない」と述べた一節を思い出していました。

※WEBにて新十津川中学校の様子を発信しております。

WEB 校長室 青雲の志【<http://www1.odn.ne.jp/~aao32720/index.shtml>】

新十津川中だより

新十津川中学校
学校通信
発行
平成 23 年 7 月 22 日

やまびこ ・ やまびこ

新十津川中学校長 高瀬裕二

盛夏の候、保護者の皆様におかれましては、常日頃、本校生徒のためにご尽力頂いていることに心より感謝とお礼を申し上げます。

4月より「学力向上」を今年度の目標としてとり組んでまいりまして、明日からいよいよ長い夏休みに入ります。今回、中間の評価を含めそのとり組みのいくつかをご紹介します。

先ず、道教委よりの指定を受け、中学校を拠点校に新十津川小学校とで巡回指導教諭による小中連携学力向上事業を実施し、確かな学力の向上を図っております。具体的には新十津川中学校の川村教諭が週6時間、新十津川小学校へ出向き、6年生の算数の授業を担当の先生と共に行っています。今では普通になってきた複数の先生で授業をする、チームティーチング（TT）の小学校・中学校の連携版です。小学生は「お兄ちゃんが所属している野球部の先生なのでよく知っています」、「つまづいているところにすぐ先生方が来てくれるのでうれしいです」と語り、ますます興味を持って算数にとりくんでいるようです。

さらに、中学校独自のとり組みとして「習熟度別授業」を学習の差の付きやすい、数学と英語に取り入れました。単元や章の終わりに数時間、学年2クラスを単元ごとに生徒の希望に応じて「じっくりコース」「わくわくコース」など、3コースにわけて、少人数による授業を実施し、きめ細かく学習内容の定着を図るのです。生徒からは「習熟度別授業は、TTより更に少人数になっているので、わからないところをすぐ解決できます」と意欲的な声が上がリ、更に内容の充実を図っているところです。

夏休みを目前にして、学力向上のとり組みは地域でも始まりました。「新十津川町確かな学び推進会議」では、保護者のみなさんよりの「長期休業中に、個々の児童生徒のつまづきを解消するとり組みを早急に」と言う願いを受けて、長期休業中の学習サポート事業「やまびこ」を計画、実施することになりました。講師は将来教師を目指す教育大学生や退職された先生方で、農村環境改善センターにて、4日間の学習サポートを行います。

今年初めてのとり組みですが、申し込みは既に小・中併せて120人を超えました。「新十津川の子どもたちに高い学力を」とのとり組みは、ピンネの山並みにやまびこのようにこだましております。

※WEBにて新十津川中学校の様子を発信しております。

WEB 校長室 青雲の志【<http://www1.odn.ne.jp/~aao32720/index.shtml>】

新十津川中だより

新十津川中学校
学校通信
発行
平成 23 年 8 月 31 日

母なる優しさにつつまれて



新十津川中学校長 高瀬裕二

熱かった夏休みも終わり 1 学期の後半がスタートしました。1 年中で一番さわやかな気候に恵まれ、「実りの秋」「灯火親しむ」とか「スポーツの秋」と言われるように、勉強や運動に打ち込む絶好の季節です。また、中学生が大きく成長する時です。しっかり目標を持って日々の授業に集中し、行事や部活動などにも積極的に取り組んで自分自身を鍛えていくことを願っています。

さて、皆さんはこの夏休み、どのような思い出が心に残っていますか？ 私は、児童生徒のみなさんと共に 7 月 26 日より訪れた、母村・十津川村での 4 日間の数々の思い出が、昨日のこのように思い出されます。

7 月 26 日、肌を突き刺すような陽射しと、汗も乾かない蒸し暑さの中、バスは溪谷の狭い国道を走り十津川村に着きました。村の入り口には上野地と谷瀬の両地区を結ぶ有名な谷瀬の吊り橋がかかっています。十津川村の中学生の調査によると、村内には生活のための吊り橋が 60 ヶ所もあるそうで、中でも谷瀬の吊り橋の高さは 54 m もあるそうです。高所恐怖症で一番迷惑をかけそうなのが団長の私で、出発前から「無理」と思っていました。自由に吊り橋の上を走り駆ける小学生たちに、「校長先生だいじょうぶですか？」と励まされ、何とか橋の中央までは行くことができました。足が震えながらも見えるマリブルーの谷底。122 年前、この谷が埋まるような山津波が村を襲ったときのことを、昨年新十津川小学校の 6 年生が学芸会にて演じてくれました。残るも地獄、行くも地獄の十津川村人の苦しみが谷底より伝わってきました。

旅館では、村あげて「ようきたのら」と、122 年の昔にタイムスリップする歓迎会が夜遅くまで続きました。訪問先の折立中学校では芝田校長先生以下先生方や生徒の皆さんと、学校紹介、温泉プールで水泳、お昼はカレーライスをごちそうになるなど楽しい交流の中で、生涯忘れることのできない多くの友達ができました。また、武蔵地区の方々には「花づくし」という扇子を用いた花びらが舞うような盆踊りを教えて戴くと共に、おいしい焼き肉、竹箸作り、流しそうめん、めはり寿司、スイカ割りと、昨年訪問団からも聞いてはいたのですが、母なる優しさ包まれての温かい持てなしには、表すべく感謝の言葉が見当たりません。心ゆくまでふるさとの風と香りを味わうことができました。

校長先生のふるさととは聞かれると「奈良の十津川です」と言ってしまうほど、いろいろな方々との素敵な出逢いに感動している私です。

※WEBにて新十津川中学校の様子を発信しております。

WEB 校長室 青雲の志【<http://www1.odn.ne.jp/~aao32720/index.shtml>】

新十津川中だより

新十津川中学校
学校通信
発行
平成 23 年 9 月 30 日

十六夜ほおづき



新十津川中学校長 高瀬裕二

7年前に江部乙道の駅で、名前に惹かれて購入したミニほおづきが、たくさん赤い実をつけています。名前は「十六夜ほおづき」です。十五夜は満月。十六夜（いざよい）は、ためらうという意味があり、十五夜の月より、やや遅く出る月、ためらいながら昇る月という意味です。このミニほおづきに「十六夜ほおづき」と名付けた方はどんな方なのでしょうね？

「一年前の学芸会で・・・」と、TV取材を受けていた中学1年の女子生徒が、ためらいがちに声を上げました。昨年、新十津川小学校の学芸会にて6年生全員で、120年前の十津川村での大洪水や山津波の被害により、十津川郷の人々が北海道への移住を決断するまでの経緯を演じました。今でもその迫力のある演技の一つ一つが町民の脳裏にしっかりと刻まれています。

中学1年生の彼女にとって、今の母村を詳しく知りたいと参加した7月26日よりの訪問団。「ようきたのら」と村中の方々より大歓迎を受けて帰ってきた矢先、テレビから映し出された十津川村の台風の光景が、一年前の自ら演じた劇と重なったのです。繰り返された歴史に励ましの言葉すら見当たりません。

学校訪問をした折立中学校では先生方が歩いて家庭をまわり、学習プリントを生徒に届けているそうです。新中・羽下生徒会長が、学びたくとも学べない十津川の中学生の皆さんへ届けようと、全校生徒による「励ましのメッセージ」、「千羽鶴」、「ビデオレター」等の作成などを提案し、すでにクラスでとり組みが始まりました。早く全員が元気な顔を合わせて、安心して勉強ができると良いですね。

さて、10月28日、旭川市において、児童・生徒へ学級活動・学校行事などを通して自主的、実践的な態度を育む、北海道「特別活動研究大会」が行われます。担任でした、新十津川小学校の長嶋先生が、昨年の六年生全員が心一つに汗を流した劇、「十津川物語」の取り組み経緯を発表いたします。

偶然にも助言者は新十津川移住4代目にあたる、由仁町立川端小学校・中井清一校長。まさに苦難を超越した母村と新十津川の強い絆がお二人によって全国に伝えられます。私も是非参加して、両町村の中学生の思いを伝えてこようと思います。

※WEBにて新十津川中学校の様子を発信しております。

WEB 校長室 青雲の志【<http://www1.odn.ne.jp/~aao32720/index.shtml>】

新十津川中だより

新十津川中学校
学校通信
発行
平成 23 年 10 月 31 日

食育で笑顔の毎日を… 秋刀魚・調理実習 

新十津川中学校長 高瀬裕二

現代の食生活は見かけ上は豊かに見えますが、外食・インスタント食品・高カロリー食品の増加や栄養素摂取の偏りにて健康面へ不安が指摘されています。中学校では学校給食とも関連させ、家庭科や栄養教諭の授業などを通し「食に関する指導」の充実に努めているところです。

さて、10月、中学2年生が家庭科の調理実習にて、一人一匹ずつの秋刀魚の蒲焼きに挑戦しました。手順は、「先ずウロコを包丁で削り落とし、三枚におろします。そして頭を落とし、はらわたをとって、フライパンに油を引き、醤油とみりんで味付けをします」と、新堂先生の実演。

「さあ！今朝、根室から着いたばかりの新鮮な秋刀魚ですよ、お皿をもって一人ずつ取りに来て、始めて下さい」との指示で、生徒達は早速包丁を入れます。でも、いざとなると、ちゅうちょしています。理科の「解剖」授業を連想したと話していた生徒もいます。「お頭付きの魚なんて、触ったことがないです。見たことあるのはサケくらいかな？」と、生まれて初めて魚を触った生徒もいます。「家では、スーパーで全部さばいてもらうんだもの」と家庭でも魚は触らせてもらえないようです。

「チ、チョット、チョット・・・よし！」やっと思を決して、包丁を手に持ち、秋刀魚のさばきが始まりました。

真剣な眼差し、やがて、上手に包丁を使いこなし、ていねいに秋刀魚をさばきはじめる生徒が表れはじめました。回転寿司の職人さんのように、ていねいに秋刀魚をさばき、お皿に盛り、実習台をさっと洗い清潔を保ちます。この、ていねいにさばく姿に「秋刀魚の命をいただく」、「食材を無駄にしない」など、先生が教えてくれたことを改めて思い出していたようです。

できあがった「秋刀魚の蒲焼き」は大変おいしく、「今度の食育の日のおかずに、蒲焼きを作ろうかな」と蒲焼き弁当に意欲を示す生徒もおりました。

来る11月29日は今年第2回目の食育の日です。ぜひこの機会にご家庭の食事の様子を振り返っていただいて、ご家庭でも話題にさせていただけるとありがたいと思います。昨年より、お弁当持参といたしましたので、自分で献立をたてお弁当にして持参することで、お腹を満たすだけでなく、大切な栄養素の摂取、食材を無駄にしないなど食に関する興味や、作っていただく方への感謝の気持ちも改めて学んでほしいと願っています。

※WEBにて新十津川中学校の様子を発信しております。

WEB 校長室 青雲の志【<http://www1.odn.ne.jp/~aao32720/index.shtml>】

新十津川中だより

新十津川中学校
学校通信
発行
平成 23 年 11 月 30 日

龍を育てる



新十津川中学校長 高瀬裕二

ブータン王国、ワンチュク国王夫妻が、被災地福島県相馬市にある桜丘小学校を訪れた際、ブータン王国のシンボルである『龍』のお話をなされました。

『龍』は水を飲むでしょうか。水を飲めば『龍』の口からせっかく出している炎を消されると思いませんか？と優しく子どもたちに話しかけます。



『龍』は自分の体験の上に存在し、一人ひとりの心のなかに、経験によって大きくなる『龍』がいます。私たち一人ひとりの中に『人格』という名の『龍』を持っています。だから、年をとるほど経験と共に大きく、強くなるのです。大切なことは、自分の『龍』を鍛錬して、感情などをコントロールすることが大切なのです。成長するに伴って、自分の『龍』を大きく素晴らしく育てていって欲しいのです。

ワンチュク国王は、ブータン王国の子どもたちにも「自分の『龍』を養いなさい」とお話しして聞かせるそうです。そのニュースを聞きながら、私は平成 17 年にお会いし交流を深めた、ブータン王国の若き校長先生方を思い出していました。

平成 17 年 12 月 7 日はブータン王国の 20 歳台の若き校長先生方 10 名をお招きし、当時勤務していた中学校で全日公開交流を行いました。ブータン王国は新しい文化によって大切な文化が滅びないように、入国を厳しく制限している国です。若き校長先生方は民族衣装「ゴ」を身につけ教室にやってきました。

手鏡を見ながら自画像を描き上げる美術の授業を見て、「私の学校では、このような授業はできない、全員が手鏡をそろえることができないのです。」「私の学校は、街から徒歩で 3 日かかります。途中



で雪ヒョウ (Snow leopard) に会うことがあります」「日本は施設が十分に整っています。生徒達は、吹奏楽の楽器には触れたことはありません。」「しかし、国王と共に、“子どもは未来からの宝物”の気持ちで教育を行っています」と誇らしげに話してくれました。

数学の教師が教えるマニュアルのようなものがあるのですが、その第 1 ページにこう書いてあります。「君は数学を教えるために教壇に立つのではない、ブータンの将来を担う人間をつくるために教壇に立つのだ。それを忘れるな」と。まさに風が吹き、心が揺れた一日でした。

私は、改めて何のために勉強をするのかを教えられました。

※WEBにて新十津川中学校の様子を発信しております。

WEB 校長室 青雲の志【<http://www1.odn.ne.jp/~aao32720/index.shtml>】

新十津川中だより

新十津川中学校
学校通信
発行
平成 23 年 12 月 26 日

チームワーク、助け合いの原点



新十津川中学校長 高瀬裕二

空からの贈りものが舞い降りてきます。ピンネシリの指笛とともに、北国の冬はいつそう足を早めているように感ずる今日この頃です。

11月24日、「チームワーク、助け合いの原点」と題して伊藤龍治さんの講演会を行いました。伊藤さんは札幌市生まれ、世界初のジャンプワックスマン、全日本アルペンコーチをなされ、北海道新聞にコラムを執筆。テレビ、ラジオ、講演などスポーツジャーナリストとして活動中です。

震災後、中学校講演行脚をライフワークにしたいと考え、第一回目の講演を新十津川中学校で行いましたと、道新のコラム「伊藤龍治のもっといい汗いい話」に綴りました。

「チームワーク・助け合うことの原点」60分の講演でした。

188人の目の輝きに助けられ、1976年インスブルック冬季五輪のときに笠谷選手をはじめとするジャンプ・複合選手・監督・コーチの皆さんからいただいた「ウールのメダル」である、赤いセーターも持参しました。妻の遺品であり、我が家の家宝でもあります。

新十津川町にとっては、奈良県十津川村は「母なる村」、ルーツの村なのです。9月の集中豪雨で甚大な被害を受けた母村に対し、新十津川町は見舞金・義援金・人材派遣・米の提供・そして小中学生による励ましの寄せ書き。正に「チームワーク・助け合うことの原点」を実践したのです。私のコラムのタイトルで言えば、「がんばりは誰のために」「ウールのメダル」「敗者への慰め」「試走者たちの金メダル」を、語りました。

きょうの夜、私のブログにコメントが入りました。

「感動して心が震えました。これからも頑張ってください」

中学生の純真な言葉が、初老の男の心を奮わせることもあるのです。

さらに 生徒たちからの感想文が送られてきました。

「そしてウールのメダル、紙のメダル。物自体は輝いていないけれど、それが輝いて見えるのは、きっともらった人もあげた人も心が輝いているからだと思いました」。

「いま、わたし、なんか、言葉に表せないほど感動しています。テストジャンパーとか、金メダルを渡すところ、涙が出てきてしまいました。きょうの話は一生忘れません。心のタンスに大切にしまっておきます」

じいちゃん、泣いたわ！ この感想文はじいちゃんの宝物だ！

ありがとうね。また、会おうね。

<伊藤龍治のもっといい汗いい話より；承諾済>

伊藤龍治さんの講演とコラムが、生徒に感動を与えて生徒を輝かせ、その魅力を引き出だしていただきました。

新十津川中学校には、保護者の皆さんや地域の皆さんなど、たくさんのサポーターがいらっやいます。そして、生徒たちをはぐくむという私たちの使命を支え、力を与えてくださっています。来年も、皆さんにご協力いただきながら、生徒たちと共に希望を語っていきたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。皆様、よいお年をお迎えください。

※WEBにて新十津川中学校の様子を発信しております。

WEB 校長室 青雲の志【<http://www1.odn.ne.jp/~aao32720/index.shtml>】

新十津川中だより

新十津川中学校
学校通信
発行
平成24年1月31日

いのちの根



新十津川中学校長 高瀬裕二

皆様、新年明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願ひいたします。

さて冬休み明けの全校集会は体育館の温度が4℃にしか上がらず、風邪を引いたら大変なので、私のお話は、「学校便り」に載せるのでそれを読んで下さいとお願ひしました。以下はそのとき用意していた要旨です。

今日は「いのちの根」というお話をします。

昨年、家庭菜園に凝っていました。トマト、カボチャ、キュウリ、スイカとたくさん苗を買ってきて、「よし絶対に愛情をかけて、農家に負けないくらいな物を作ってやるぞ」と、大型店で牛糞や堆肥や肥料を買ひ、ホースで水をせっせとていねいに撒きました。大きな背丈になり立派な実をつけるのですが、いろいろな方々からいただくものより甘くなく、おいしくないのです。また実の数も少なく付いています。

8月のちょうど夏休み終わる日に新十津川農業高校の若い先生とお会いする機会ありましたので、このお話をしました。

若い先生は、農高ではたくさんの野菜を作っていますので、校長先生のようにたくさんの肥料や世話はできないので、その原産地にあった育て方をしているのですよと、ていねいに“秘訣”を教えてくださいました。その秘訣とは、・・・水をやらないのです。水をやらないので、当然しおれてきます。ピンチの状態ですね。そして、ギリギリの状態を続けるのです。このようにして、植え付けた後にしばらく水をやらなかったトマトやキュウリは、背も高く、茎も太くたくましくなります。植え付け後に毎日水をやったものと比べると、明らかに違うほど、たくましくなります。

つまり、「水がない」というピンチの状態を経験したトマトやキュウリは、水を求めて根を深いところまで張りめぐらすのです。土に深く根付くので、水分や栄養分を吸収する力が強くなり、背の高い茎の太いものになるわけです。そのときに味の素をほんの少し水に溶かしてかけてみて下さい。さらに甘くおいしくなりますよとも教えてくださいました。これはほんとかな？

更に図々しくスイカやカボチャをたくさん収穫する方法という方法もお聞きしました。ふつうスイカやカボチャは放っておくと、1本のつるをとどんどん伸ばして、先ず自分の体を大きくしようとする。次の世代のことなんか考えない。葉が3枚出たらいったん先を止めてしまう、そこからまたツルが出て葉が3枚出たらまた先をとめる、そして次に出てきたツルを伸ばすと、「このままでは大変だ！次の世代を残さねば」と、め花を咲かせるのだそうです。そして、そろそろ花を咲かせるころになったら、いきなり根元を引き抜きます。全部抜ききってしまうのではなく、プツプツと根が切れる程度にまで引っ張り、根が切れたら、上から土をかぶせるのです。スイカやカボチャは、究極の逆境を経験することで、たくさんの実をならせるほどに成長するんだそうです。

私たち人間もいっしょですね。

私たちは、ピンチや逆境や悩みを経験するからこそ、根を深く張って強く大きくなれるのです。今の世の中ついで、簡単な方法を選んでしまいがちですが、そんな時、「目には見えない部分」つまり「根っこ」を意識してみることで、地に足がついた生き方ができるのですね。

※WEBにて新十津川中学校の様子を発信しております。

WEB 校長室 青雲の志【<http://www1.odn.ne.jp/~aao32720/index.shtml>】

新十津川中だより

新十津川中学校

学校通信

発行

平成24年2月29日

「なかよしの素」



新十津川中学校長 高瀬裕二

「僕が苦しいのはたった一時間ちょっと。ふくしまの人たちに比べたら、全然きつくなかった」箱根の山を走り切ったとき東洋大・柏原竜二選手は語っていた…。あの3.11東日本大震災より一年が過ぎようとしています。日本中の皆さんが、あらためて「幸せ」とは何かを考えています。

私は教師を志した自分を見つめていました。教えるとは希望を語ることでなかったか。道北の自分を待っている僻地の中学校に赴任をしていった、22歳の幸せな自分を思い出していました。

そんな中、インターネットで見られる「文部科学広報・2月7日号」にて一編の詩に出会いました。「楽しい子育て全国キャンペーン」～親子で話そう！家族のきずな・我が家のルール～三行詩というキャンペーンに、今年度は、震災をきっかけに、被災された地域を含め全国から6万件にも及ぶ応募あったそうです。

ちょっとのがまんは？ 「幸せの素」
みんなの笑顔は？ 「元気の素」
あいさつは？ 「仲良しの素」

鍛治美里 長崎県佐世保市 /小4年

生徒の皆さんには、スポーツ交流会の挨拶の中で紹介しましたので覚えているでしょうか。学校は、みんな「なかよし」が一番幸せですね。

※そして最優秀の作品にはイラストも描いてありましたのでご紹介します。

◆ 小学生の部

大津波 父さんの店をのみこんだ
父さん負けるな 私がつくその日まで
〈西村沙弥 宮城県松島町 /小4年〉

◆ 中学生の部

そっと顔をなでる母の手がやさしくて
寝たふりをする。
〈秋山椎名 愛媛県今治市 /中1年〉

◆ 一般の部

家庭菜園 似てます
なぜか うちの子に
不揃いだけど 味がある
〈小寺優子 愛知県名古屋市〉



日本中、生きているということに感謝し、希望に向かって前に走れることに、幸せを感じているのです。

※WEBにて新十津川中学校の様子を発信しております。

WEB 校長室 青雲の志【<http://www1.odn.ne.jp/~aa032720/index.shtml>】

新十津川中だより

新十津川中学校
学校通信
発行
平成 24 年 3 月 23 日

根をしっかりと



新十津川中学校長 高瀬裕二

冬休み明けより、高校入試のための面接練習を行いました。後輩に残す言葉はありませんかとの間に、「校長先生、是非伝統の合唱と新十津川中学校の校歌を大切にしたい」と伝えて下さいという答えが返ってきました。実は3年生は、「ゆめりあ」での合唱交流会で、担任の先生方のピアノ伴奏と指揮にて、初めて合唱に編曲した校歌を披露しました。「校歌が大好きです」なんて、堂々と胸を張って歌う3年生に、1、2年生は尊敬の念を強く持ち、是非あの校歌を共に歌ったみたいと願い、それが卒業式での「校歌」合唱になりました。見事なハーモニーに式場に来られていた方々全員が感動で身体が震えておりました。

校歌の作詞は、中学校横の円満寺の住職であり、全国的に有名な俳人の土岐鍊太郎さんです。42年前この体育館で初めて校歌を披露したとき、未来の君たちに届くことを夢見て本当にうれしそうに聴いていたそうです。3月13日、59名の卒業生は3年間この学舎で、共に校歌を歌った「幸せ」をかみしめ、未来に羽ばたいていきました。

在校生のみなさんへ

今、日本人としてどう生きるか、子どもたちの指標となるべき大人が生き方を迷う時代です。だからこそ君達には、校歌の一節♪清く正しき志操つちかい、未来に強くはばたく♪のように希望を持ち続け、最善を尽くす精神を培い、力強く生き抜くことを学んで欲しいと思います。そしてその夢を成しえるためには、根がしっかりと大地についていなければなりません。大きな花、沢山の花を咲かせたければ、枝も幹も太くなければダメですし、それを支える根は、もっと太く深くはっていなければならないということです。

根をしっかりとほるためには、苦労も努力も必要です。もちろんさまざまな経験も必要です。学校で勉強をすることも重要であるということです。なぜ、勉強するのか、それは根をしっかりと育むためであるということ、改めてかみしめて欲しいと思います。

新十津川の春。ピンネシリの風が雪を融かし、石狩の清流となり、大地は眠りから覚める。願わくばこの学舎にて、共に汗して働く中に道理や生きる道標があること学び、輝かしい未来の担い手となって欲しいと願っております。

※WEBにて新十津川中学校の様子を発信しております。

WEB 校長室 青雲の志【<http://www1.odn.ne.jp/~aao32720/index.shtml>】